

ものを創る

白洲正子

読売新聞社

ものを創る

昭和四十八年十月五日 第一刷
昭和五十年五月二十一日 第三刷

著者 白洲正子

編集人 松田延夫

発行人 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

大阪市北区野崎町七七

北九州市小倉北区明和町一―二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口印刷製本株式会社

装幀者 桒折久美子

定価 1500円

© 1973, Masako Shirasu

0095-701450-8715

口絵写真 牧 直視

齊藤 一男

吉越 立雄

橋本 彰禧

本文写真 牧 直視

齊藤 一男

箱 北大路魯山人作「武蔵野」

写真 齊藤 一男

ものを創る
目次

人と芸術

北大路魯山人

7

浜田庄司

17

井上八千代

28

梅若実

37

吾妻徳穂

48

笹部新太郎

59

梅原龍三郎

70

人とも

広田熙

青山二郎

細川護立

安田靱彦

鳥海青児

人と作品

黒田辰秋

あとがき

214 129

115 107 97 90 81

人と芸術

北大路魯山人

近ごろ、焼きものが集まると、「魯山人が生きていたらなあ」という言葉をよく耳にします、殊に、生前仲が悪かった人ほど、懐かしがっているようです。私が魯山人を知ったのは、戦後の比較的近い期間だけでしたが、それでも何か面白いものが手に入ると、彼に見せたかった、喜んで貰いたかった、と思うくらいですから、深く付き合った人々にとっては尚更のことでしょう。

たしかに、魯山人ほど独特の鑑賞眼をもつ人は少なく、またそれを作品の上に、生かした人もおりません。が、もし現実生きていたとしたら、永久にこんな言葉は聞けなかったに違いありません。それ程彼は、世間の人々に評判が悪かった。というより、他人と折合えない不幸な人間で、私なんかよく「黙って物を作っていれば、もっと受けるのに」と、いったものですが、亡くなった今日、作品だけ残っているのを見ると、淋しく思われてなりません。

はじめて魯山人に会ったのは、終戦直後のことでした。何しろ、むつかしい人物ということでおそろおそろ青山二郎さんに連れられて行ったのですがそれは聞きしにまさるいい住居でした。といっても、茶人風に美しく住みなしたというのではなく、折しも秋のさ中のことで、枯れかかったいだや苔の間に、ほととぎすが咲き、紅葉がその上に散っているのが、山間の田舎家にふさわしく、「適度に荒れているのがいいわ」と褒めますと、山人はその言葉が気に入ったようでした。

それで第一の関門は通過しましたが、御馳走になって、お酒がまわって来ると、そんなことでは済まなくなって来ました。相客は青山さんではあり、談論風発するうち、何が気にさわったのか、突然仁王立ちになり、私に向って、「もう帰れ」とどなりはじめた。私は何が何だかわからないし、帰る理由もないので、「いやよ。面白いから、まだいさして頂くわ」そういうと、拍子ぬけの体で、「変な女だ」といったきり、これはまた驚くべき素直さで座に直り、その夜は愉快に飲みあかしたのでした。

成程、魯山人のはったりといわれるのは、こういうものなのか。あるいは、女とみて、少しお手柔らかに加減したのかも知れない。それにしても、気の弱い、子供みたいな人だと、その時はむしろ好意をもちました。が、付き合うにつれ、いささかの好意ぐらいでは、太刀打ちできないこ

とがわかつて来た。えぼること、慾が深いこと、虚栄心の強いこと、それらはまだ許せるとして、有名人や金持の前には、友達も塵あくたの如く扱われることには、付き合ひの浅い私にも、我慢しかねるものがありました。ことに、長年世話になった人が、落目になった時、「あいつにはもう用はない」といったのには、むしろ哀れを感じたのですが、ある時、珍しくしんみりと、こんな話をしてくれたことがあります。

篆刻 魯山人作

——自分ほどみじめな生立ちをしたものはない。文字どおり、藁の上に生み捨てられ、お七夜の晩には、母親の懷に抱かれて、京都から雪の比良の嶺を越えて、田舎の養家へ貰われて行った。

だから親の顔も知らないのだが、その後転々と、七、八軒もたらい回しにされたあげく、七つの時には、京都市内のある木版屋に、丁稚奉公に出されていた。その頃の生活は、貧乏なんてもんじゃない、どの家に貰われても、飯もろくに食べさせて貰えず、どこでもここでも、邪魔者扱いにされるばかりだった。

「だからわたしにとっては、貧乏が敵なんだよ」と。



その木版屋に奉公したことが、魯山人の才能をのぼす上に、一つのきっかけとなったようです。人も知るように、彼は篆刻でも、一流の腕をもっていました。それはこの時に培われたもので、といっても、当時のことです。手をとって教えられたわけではなく、見様見真似で身につけたものでしょう。

折角、技術を習おうと思つて、やとわれたものの、それは一つも教えてくれず、毎日家事に追ひ回されていた。あんまりつまらないので、ふと外を見ると、筋向いの店に行燈がかかっている。そこに書いてある字が中々いい。子供心に非常に気に入って、墨も筆もない所から、いつも空に指で書いては習っていた。後から聞くと、その看板は竹内栖鳳が書いたものだったそうだが、梅檀せんだんは双葉より香ばしというべきでしょう。

そうして、十八、九の頃には、まったくの独学で、習字の懸賞に応募し、一等賞を貰ったと伝えられています。その頃から京都の有名な蒐集家、内貴清兵衛氏等にみとめられ、書や篆刻ばかりでなく、絵画や陶器、後には料理にまで、自在な腕をふるうようになりました。中でも、美術の鑑賞は独自のもので、今もてはやされている鎌倉発掘の瀬戸も、魯山人の発見によると聞きます。が、私がもっとも感心したのは、その日常の暮しぶりでした。身近に使っている道具の類に、豊かな趣味と、こまかな神経が行きとどいていたからです。

たとえば、ほんのちょっとした醤油入れにも、古瀬戸の愛すべき小品を使うとか、洋酒は、薩

摩ガラスの瓶に入れるという具合で、高価なものなら、お金を出せば誰にでも買えますが、安く、美しい物を見出すのは、中々むづかしいことだと思いました。

古九谷の絵皿なども、五枚二百円で買って来たとかいって、大変喜んでいたそうで、そういう時の山人は、ほんとに楽しそうだったと、美術商の瀬津さんが話してくれました。同じく唐津の茶碗でも、今こそ大変高い値になっていますが、当時はたやすく手に入ったもので、人にみとめられないそうした美術品を掘出してくることに、無上の喜びを感じていました。魯山人の身の回りは、そのような「発見」で埋まっており、何気なく置いてあるものが、住居と生活に調和して、いかにも生き生きと見えるのでした。

その暮しぶりは、桃山時代のお茶というものを、現代に生かしているようにも見えました。同じことが、陶器の作品についてもいえるのではないかと思います。彼は決してある種の作家達のように、工芸の本質を無視して、独創に走ることはなく、たとえば桃山時代の志野や織部、あるいは瀬戸でも、忠実に模しており、その点彼の性格とは反対に非常に謙虚な態度でした。が、模したにも関わらず、そこにはひと目で「魯山人の作」とわかるものがありました。贋物がつくれる陶工は沢山いますし、今出来のものが、本物の中にまぎれこんでいる場合はしばしばありますが、魯山人の作品に関するかぎり、そんな間違いは起らない。あくまでも、それらは魯山人の志野であり、魯山人の織部である。職人と、芸術家の違いでありましょう。

が、その「芸術」については、いつも悩まされたものでした。ふた言目には、大きな手をふりかざして「そもそも、芸術とは」とぶちはじめる。

「それをいわなければ、芸術家なんだがな」と、いくらいつても止まることはありません。それもまたもな芸術論ではなく、多くの場合、人の悪口か、自慢話です。あれ程物がよく見えて、美しい生活をいとなみ、美しい作品を造っている人が、どうしてこんな所に堕ちて行くのか。

たしかに、魯山人は、美に関しては、利休の直弟子でしたが、利休の精神は受けつがなかった人のようです。

そのことは、一番人柄の現われる、書を見ていると、何とは知れずわかって来るものがあるように思います。実に巧くて、ほればれする程美しいのに、何か此方をとりとめてくれるものがない。心に訴える力を欠くのです。書や絵とちがつて焼きものの場合、火が中間に入る為、救われていたのかも知れません。したがって、厳格な意味では、「天才」とも「芸術家」とも呼べないのでしょうが、人間の弱点という弱点をしいこみ、かたわら美しい作品を生んだ魯山人は、やはり私にとってほっとけない人物でした。

これは黒田陶苑の御主人の話ですが、ある時喧嘩して、長い間たずねないでいると、色紙を送って来た。みると、「主人なんじを愛すと云えども、なんじは却て無情、云々」と書いてある、「淋しいんですね、そんな時はどんなに怒っていても、つい行ってしまったものです。魯山人に

は、そんな無邪気な所もありました」と。

みずから籠の鳥にたとえた所も、その場の即興とはいえ、ふだんの気持が出たものでしょう。思いなしか、この小鳥は、彼の姿に似ているようにも見えます。これも黒田さんから聞いたことです。魯山人はいつもこういつていたそうです。

「目あき千人、めくら千人というが、実際には目あき千人の中に、ほんとの目あきは一人しかない。が、その一人はおそろしい」

その千人に一人のような目利きが、彼の周囲にはむらがっていました。青山二郎さん、小林秀雄さん、真船豊さんとも親交がありました。が、陶苑の黒田さん、雅陶堂の瀬津さん、珍品堂の主人こと秦秀雄さんなども、みな彼の影響を受けた人達です。人を育てることも名人で、今第一線で活躍している陶芸家の中にも、直接間接に教えを受けた弟子は多いのです。ただ残念なことに、誰一人として長つづきするものではなく、妻子に至るまで背いたのは、みずから招いたとはいえ、現代の茶人をもって任ずる人として、惜しいことでした。先生々と、あがめる取巻だけ残して、心をわかった友、技を伝えた弟子が去って行く姿を見て、どんな気持がしたことでしょう。が、人間は一生、同じ模様を描くものようです。淋しがりやのくせに、わがままで、一人よがり、人の言葉につんば同然の性格は、最期の時まで変えることはありませんでした。